

My Story

WahaKu

平成29年6月23日

# ぼくだけの物語

遙か昔のこと  
すこし思い出しながら  
書いてみることにした  
ぼくは  
記憶とは儚いものなのだ  
と知った

## 夕焼け

桃子は、音楽室への階段を駆け上がっていた。二週間前に吹奏楽部の練習に顔を出して、音楽室から綺麗な海が見えたことを発見したのを階段を飛び越しながら思い出している。

\*

音楽室の片隅では

「きょうで一学期の練習は終わりです。期末テストの間に、夏休みの合宿スケジュールを決めておきます。テストが終わったら配ります。よろしくっ！」と部長のA君が叫んでいた。

「みんな期末テスト頑張ろうぜ！」

と気合を入れていた。

そんな叫びを遠くに聞きながら

「アイツ、何を言ってんのよ。きょうの練習が高校最後の練習だったんだよ、私は……」

と心の中で叫んだあと、思わず

「あっ、ほんとうだ、そうだったんだよ、最後だったんだよ」

と声に出してしまった。

でも、声に出してしまったら、急にセンチが襲ってきて、再び外を眺め続けてしまう。

そんなふう桃子がセンチな気持ちになっているときも、夕焼けは湾を覆いつくし続けた。海は青色ではなく灰色がかっているのだが、西の空から斜めに差し込む太陽光線のせいで、ところどころ明るく輝いて見えた。そして、大きな湾の中をゆっくりと動いてゆく貨物船が紫色に光っているのは何故なんだろうか、とぼんやりと感じながら、どうして、三年生の今まで毎日部活の練習に来ていたのに、こんな不思議で綺麗な景色に気づけなかったのだろうかしら、と桃子は思った。窓際を離れるのを惜しかったので、桃子はそのまま海を見つめていたのだった。



あれから試験が嵐のようにやって来て、二週間があれよあれよという間に終わっていった。初めて見た夕暮れを、桃子は忘れることができなかった。だから、期末テストも残すところあと一日となった土曜の午後であっても、時間を惜しむことなく、誰も居ないはずの音楽室に行こうと思い立って、今、階段を駆け上がっているのだ。

土曜日やねえー。試験は月曜日で終わりだよ。だから、ちょっと音楽室でも覗いてくるよ。来週の数学は苦手やけど、何とかなるやろ。きょうまで頑張ったご褒美にちょっと寄り道をして帰ってもええでしょ、ねえママ」

と呟きながら、緊張している自分と早く解放されたい自分が格闘しているのを、他人事のドラマのように捉えながら、試験期間の二週間で過ごしてしまった自分を労わっている。

「イケナイ子だね、ママ」

ぶつぶつとひとりごとを繰り返しながら音楽室への階段を駆けあがってゆく。あの夕焼けをもう一度見てみたいな、と心のどこかで期待をしている自分にも気づいている。

もしかしたら

「誰か、いるかな」

音楽室への廊下のコーナーを猛スピードで回って、飛び跳ねるように走って、そして急ブレーキをかけて止まって音楽室の扉をバンと開けた。スカートがひらりと舞い上がり白い下着がちらりと見える。廊下には誰も居ないから、桃子は平気だ。

「おっと、信太郎君！」

## ピアノ

「なんや、桃ちゃんか。久しぶりやな」

信太郎は、そう言ったあと、再び教室の外を眺めている。

外を見ながら、いったい、何を思っているのだろうか。

と、そんなふうには桃子は思わない。かすかに感じる新太郎への好きという感情も、このときは表に顔を出さず、女子高生の多くが言う「好きでも嫌いでもなく、自分自身でもよくわからん感じかな」という感情だけであった。予想外に教室に人がいたことで、ドキドキしているに過ぎない。

お隣さんのクラスにいて一度も同じになったことが無いのに何故か友達になっちゃったというちょっと気になる友だちだが、ピピピと感じるものがあったから出会えたわけで、今は好きという気持ちなんかじゃないな、そう漠然と桃子は思っていた。18歳の心とはそのようなものらしい。

当然、試験期間中であったから、教室には誰も来ない。普通ならそこで二人の会話が始まっても構わないのに、信太郎は桃子の方を一向に振り返ろうとしないのだった。桃子のほうも「そうだ私は夕焼けを見に来たんだ」とひとりごとを言いながら、信太郎とは反対側の窓から夕焼けが山なみを包んでゆくのを眺めている。



普段の土曜なら吹奏楽部の誰かがこの部屋で練習をしている。しかし、試験期間中は例外で、練習には誰も来ていなかった。楽器も仕舞われたままで音を出す生徒は一人もいない。では、何故、信太郎がそこにいたのだろうか、という疑問が生じる。理由があった。

音のない音楽室から静かに海を見ていると、音が溢れているときの記憶が現実  
に重なるように蘇えり幻想的な時間が過ごせるのだ、ということを信太郎は身体で  
感じて知っていたのだ。

桃子と出会ったのは偶然だったが、桃子が夕焼けを見ながら何て美しい世界な  
のだらうと感動した二週間前の気持ちと同じようなものを、信太郎はいつか昔にも  
感じ取っていた。不思議な現象であるのかもしれないが、ここで三年間を過ごす生  
徒にすれば、多くの子たちが共通に感じきた必然でもあったのだ。

もちろん、そのことは誰も理屈や言葉にはできず、この二人も例外ではなかつ  
たので、静けさと夕焼けの余韻がもたらす話を切り出すことはなかった。



「私、この教室からの景色、素敵やなって気がついてん。それで今、来てみて  
ん」

「僕もそうなん。誰もがそう思うてるんと違うかなー」

「ピアノ。弾くわ。久しぶりやなあ。何がええ？」

「ガーシュイン。頼むわ」

## 教室

夕日は、三階の音楽室の中まで差し込んで来ていた。

教室の机の脚の一本一本を長いシルエットにしながら、夕日は壁や床に幾何学模様を映し出している。

桃子が弾いてくれる「ラプソディ・イン・ブルー」に耳を傾けながら信太郎は、ちらりと桃子を見るものの、誰に恥ずかしい訳でもないのに照れのようなものが襲い掛かってきて思わず桃子から目を反らした。

桃子って変な奴だな」なんて口には出さないけど「試験前に一人でピアノを弾いてやがる」と思いながら、その可愛さにときめいている。

気付いていないのは信太郎自身だけで、純白の芽生えを桃子はピアノを弾きながら感じている。

大人になりきれない信太郎と、少しオマセな桃子。二人の間に無言という愛撫のような時間が纏わりつき、ガーシュンが流れる。

「なあ、何しに来たの、この部屋に」

と信太郎が言い出しても、ピアノに集中している桃子にその声は届かない。

「ここから見ると、可愛いじゃないか、オマエ」

凜とした眼差しや短く切り上げた髪。ニキビが二つほど残っている頬をじっと見つめて、信太郎の呟きは続く。

桃子は気づかないでピアノシュモの箇所にも目を細めている。

## 海へ

「なあ、いつか夕焼けを見に行きたいな」

と小さい声で言う。

「OKよ、何処がええかな？」

短い髪をピクピクッと揺らして鍵盤を叩きながら、桃子はそう返事をした。

「ここは少しずつ、そう、pocoapocoって書いてあるやろ。そして、フォルテ  
シュモなん」

「海がええわ」

「そやったら、埠頭がええな。随分と行ってえへんわ」

最後の章で勢いよく鍵盤を叩いて髪を震わせても桃子の髪は乱れなかった。ピアノの音が部屋に響いているのを目と閉じて聴いている。そして余韻が消えてゆくのを確かめてから、桃子は窓のほうへとゆっくり歩いてきた。

刻々と過ぎる時間に押されるように、太陽光線は部屋の奥へ奥へと差し込んでくる。反射した光が部屋じゅうを鮮やかな赤色に染めている。

色白の信太郎の顔が赤く染まっている。遠い山なみのすぐ上に、まるで製鉄所の溶鉱炉から流れ出る鉄のように真っ赤になってまん丸に浮かんだ太陽が窓ガラスを焼き尽くそうとしている。

「真夏の太陽はきっと今ごろ南アフリカ大陸の上空付近にあって、白く燃えるように浮かんでいるに違いないんだ。その光が地球に斜めに突き刺さって、それが厚い空気の層を横切りながら真っ赤に変わるんや。きっとそうや。だから、雲が真っ赤に染まるんや」

(桃子の顔がいつそう赤くなってくる)

「そして真っ赤な雲は、西の方角から東の空へとまるで松明が燃えるときのよ  
うに赤々と移動してゆくんや。太陽が沈んでゆくときに光が成層圏で乱反射を起こ  
すから夕焼けは赤いや。波長の短い光は吸い取られてしまって、夕焼けはだんだ  
んと紫色に燃え尽きるように弱まってくるのよ。東の空が赤みを帯びることを反対  
夕焼けって呼ぶんや。そいつが出始めるころには空全体が薄暗く衰えてしまってい  
てなあ、海と陸地の境目がはっきりと区別できなくなっているんや」



信太郎は自分に言い聞かせるように話した。その横で同じ窓枠に並んだまま桃  
子は、その情熱の塊のように語り続ける信太郎の真っ赤に染まった横顔を見つめて  
いる。

「それって、ほんとうなん？」

「いいや、僕の想像も入ってるけどな」

偶然、音楽室には誰もいなかった。この人、ロマンティックなことを言うこと  
もあるんだな、と桃子は思っていた。

「先輩、私たちって恋人同士みたいやねえ」

「ほうー、なるほどな、それもええなあ」

誰かのカバンが教室の片隅に置きっ放しにしてあるので、そのうち誰かがやっ  
てくるかもしれない。だから、二人だけの内緒の会話を交わしているという気持  
ちはさらさらなかった。

「第一埠頭がええわ。秋になってももう少し涼しくなったら、誘ってくれる？あ  
そこから夕日を見てみたいわ、私……」

「フォルテシュモのところ、もう一回弾いてくれたらOKするわ」





## 夏

あのあと夕焼けをゆっくりと眺めたわけではなかった。桃子がピアノを弾いている間、部屋の中を歩き回ってみたり窓辺から校庭を見下ろしてみたりしながら、信太郎は一向に思い切れない考えにやきもきしていたのだ。

「恋人みたいね、第一埠頭がいいわ」

彼女が何気なく言葉した恋人というマシュマロのような響きが脳裏に大きな余韻を残し、それを消滅させまいとする気持ちが高ぶりながら自然に押し掛かってきたのだろう。いつもの信太郎らしくもなく泣きそうな顔をして俯いて教室を歩き回った。

あの日はそうして泣き顔のまま日が暮れてしまった。学校からの坂道を二人で並んで歩いたことも、決して偶然ではなかったいつもの挨拶のあとのように、何の変哲のないままエキストラの役者たちの演技のように時間とともに流されていった。誰の記録にも残らず、学校界隈の珍しい風景として目立ったわけでもなく、木立の中の坂道を二人が歩いていったという出来事が、そのひと時にありましたというだけだった。

学期末試験が今日で最後だという日の朝も桃子は、いつものように日の出から1時間ほど過ぎて目が覚めた。窓辺のカーテンの隙間を通ってくる陽射しが枕元まで差し込んで眩しいだけではなく、おでこが焼け爛れてしまいそうなほどに熱くなってしまったからだ。

「そうだ、昨夜は七夕様だったんだな」と突然、桃子は思い出した。とても大事なことを忘れていたことを悔やんでみたが、この日まで持続させてきた期末試験の緊張が1ヶ月ほどの喜怒哀楽を封印してしまったままで、髪の毛が跳ねていることさえも一切気に掛からなくなってしまうほど別人に変貌していたので、このときに

はさすがに「まあいいか」程度にさらりと振り返って、やがて七夕のことはすっかり忘れてしまった。



クマゼミが庭で激しく鳴き始めた。

ちょうどそのとき、「朝ごはんの用意ができたよ」と階段の下から桃子を呼ぶ母の声がした。

「桃ちゃん、クマゼミ、きょう初鳴きねえ。梅雨が明けるわ。いよいよ」  
七夕の明るる日に気温が30℃をビューンと越える真夏日がやってきて、ポンと梅雨が明けて、桃子の期末試験も終わったのだった。

## 夏休み

あれから数日で学校は夏休みに入った。

クラブ活動の練習は毎日続いたので、音楽室へは学期中のように生徒がやってきたが、三年生の顔ぶれは疎らで、桃子も練習に出かけることはなかった。行きたいな、楽器をやりたいなと思っても少し我慢をしなくてはならなかった。そんなとき、「わたしは受験生なんだから」と言い聞かせては家中で一番涼しい空間を探して捻じり鉢巻きで英単語帖や数学公式集に食いついた。

「信太郎君のほうは勉強、はかどっているかな…」と考えることもあったが、桃子は理系で数学物理学科志望だったし、信太郎は文芸学部という桃子にしたらサッパリ意味のわからないところへ進学を希望しているので、競争心も湧いてこなかった。何か共通点を見つけて質問をしてみるなどということ自体も全く頭に浮かばない。受験に関しては全く他所の人だった。

でも、そうなるとうわたしたち、離れ離れになってしまうのか…

「信太郎君のほうは勉強、はかどっているかな…」と考えることもあったが、桃子は理系で数学物理学科志望だったし、信太郎は文芸学部という桃子にしたらサッパリ意味のわからないところへ進学を希望しているので、競争心も湧いてこなかった。何か共通点を見つけて質問をしてみるなどということ自体も全く頭に浮かばない。受験に関しては全く他所の人だった。

でも、そうなるとうわたしたち、離れ離れになってしまうのか…。

好きではないにしろ、多感な高校時代のことだからそう感じてもいいはずだが、桃子は根っから楽天主だったのだろう、そういうことさえも思い浮かべることなく、大学生になったら信太郎君と恋人になってしまえたら楽しいかも、などという他愛もない程度のことしか考えていなかった。



このころから異常気象という言葉が流行り始めて、この年の夏休みもとても暑い日が続いた。

信太郎は音楽室の隣に部室を構える美術部員だったので、夏休みのクラブ活動はない。だから、勉強が嫌になったらスケッチブックに絵を描いていれば気が紛れた。勉強が嫌になると、休みに入る前に桃子が貸してくれたレコードをかけながらスケッチブックに向かっていた。

小椋佳の「うす紅色の」「夢は流れて」「少しは私に愛を下さい」などを聴いていると少し大人になったような気分になれるのだが、実際には、高校三年生の割に信太郎はまだまだ幼く相当に純真な子だった。

「桃ちゃん。貸してあげたゲーテ、読んでくれてるかな」とふと思い、手紙を書いてみようと思立った。

この頃は、ハガキが10円、封書が20円だった。

お母さんが使っている居間の鏡台の抽斗からハガキを1枚貰って、第一埠頭を思い出しながら色鉛筆でスラスラと絵を描いた。そして、ブルーブラックの万年筆で、「もうすぐ夏休みが終わります」と書き添えてポストに入れた。

お盆も過ぎて、あと数日で学校が始まろうとしている。

## ゲーテの文庫(若きウェルテルの悩み)

二学期が始まる数日前、信太郎宛に手紙が届いた。それは桃子からの手紙で、「私の貸したゲーテを読んでくれましたか」という内容だった。

「ゲーテはまるっきり面白くないし、読書はからっきし苦手で、自分でも文芸学科を迷っていたので」というような返事を書いて封書にしまった。ところが、すぐにそれをポストに入れるつもりが、うっかり忘れている間に新学期になってしまい、学校が始まってからの桃子に渡すことになる。

桃子は手紙にゲーテのこと以外に進路のことも書いていた。

「私は理系に進みますって宣言したんやけど、ほんとうはいろいろと迷うところもあって、芸術学部の文芸学科に進路変更しようかと思っているの。信太郎君は物理が得意やし、男の子で数学が苦手やなんていう弱音は禁物なので、ぜひ、理系に進んで欲しいな。男は数学やん、やっぱし」

信太郎を悩ませたのは、ゲーテがあまりにも詰まらなかったことの言い訳よりも、自分の進学先をコイツのアドバイスで簡単に変更しました、と思われるのが嫌だった。そこで、手紙の返事には、東京のほうの教育学部を受けることにしたよ、と書いて誤魔化した。

でも、実際に信太郎は、このときに文系から理系かで志望を迷っていた。わずか5ヵ月後に入学試験が控えているという時期に優柔不断な子だった。

手紙の最後に「離れ離れになるけど、手紙くれよ」と書いてあるその手紙は、二学期が始まって二三日過ぎた昼休みに屋上まで桃子を呼び出して渡した。

あの日は学校の帰りにも一緒に帰った。信太郎は夕日の綺麗な道を桃子に教えてもらった。